

ラファエル・フォン・ケーベル (Raphael von Koeber、1848-1923)

ドイツ系ロシア人の哲学者・音楽家。明治政府のお雇い外国人として東京大学で哲学、西洋古典学を講じ、その他東京音楽学校でピアノなどを教えた。

6歳よりピアノを学び1867年にモスクワ音楽院へ入学、チャイコフスキイに師事し1872年に卒業。しかし内気さゆえに演奏家の道を断念し、ドイツのイエーナ大学で博物学を学ぶが、のち哲学に転じ、ルドルフ・クリストフ・オイケンに師事。30歳で博士号を得た後、ベルリン大学、ハイデルベルク大学、ミュンヘン大学で音楽史と音楽美学を講じる。

その後、友人のエドゥアルト・フォン・ハルトマンの勧めに従って1893年（明治26年）6月に日本へ渡り、同年から1914年（大正3年）まで21年間東京大学に在職し、イマヌエル・カントなどのドイツ哲学を中心に、哲学史、ギリシア哲学など西洋古典学も教えた。美学・美術史も、ケーベルが初めて講義を行った。学生たちからは「ケーベル先生」と呼ばれ敬愛された。夏目漱石も講義を受けており、後年に隨筆『ケーベル先生』を著している。他の教え子には安倍能成、岩波茂雄、阿部次郎、九鬼周造、和辻哲郎、深田康算、大西克礼、波多野精一など多数がいる。

1904年の日露戦争開戦の折にはロシア帰国を拒否したが、1914年になって退職し、ミュンヘンに戻る計画を立てていた。しかし横浜から船に乗り込む直前に第一次世界大戦が勃発し、帰国の機会を逸した。その後は1923年に亡くなるまで横浜のロシア領事館の一室に暮らした。墓地は雑司ヶ谷霊園にある。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

2 「哲学会」創立期における講演会の模様

伊藤吉之助「哲学会資料」・『哲学雑誌』第三百號に載る。

明治17年（1884）一同19年

- 明治17年1月26日、有志数十名学習院内に相会し、哲学会創立の事を議し、規則八条を設く。之を本会創立第一回例会とす。当日入会の承諾を得たるもの、加藤弘之・西周・中村正直・西村茂樹・外山正一・原坦山・島地黙雷・北畠道龍諸氏総べて29名なり。
- 2月、東京大学内にて本会第二回例会。島地黙雷氏「法の説」、井上哲次郎氏「支那哲学概論」の講演あり。
- 第3回例会。外山正一氏「斯賓撒（スペンサー）氏不可知的を論ず」、原坦山氏「印度哲学と諸学の徑庭ある説」。（明治17年3月20日）
- 第5回例会。嘉納治五郎氏「意を論ず」、長瀬時衡氏「身体の強弱人壽の長短を論ず」。
- 第6回例会。三宅雄二郎氏「耶蘇を論ず」、吉谷覺寿氏「諸法の原理」。
- 第7回例会。寺田福寿氏「佛教と理學との關係」。
- 第8回例会。加藤弘之氏「男と女を圧するの要」、小崎弘道氏「基督教を信ずるの理由」、佐々木東洋氏「佛教に信を起せし所以」。
- 第10回例会。原坦山氏「佛教の実帰」（明治18年1月20日）
- 第11回例会。中村正直氏「我は造物主ある事を信ず」。
- 第12回例会。南條文雄氏「印度哲学中数論の綱領」。
- 第13回例会。棚橋一郎氏「信と理との弁」、高橋五郎氏「佛教哲学一班」。
- 第14回例会。井上円了氏「偶然論」。
- 第15回例会。吉谷覺寿氏「佛教についての疑問に答ふ」。
- 第16回例会。井上円了氏第14回の続きを講演し、原坦山氏「学教の異同及び佛教諸教の異同」。（明治18年9月21日）
- 第17回例会。島田重礼氏「東洋哲学の概略」、有賀長雄氏「孔門哲学或考」。
- 第18回例会。寺田福寿氏「真宗大意」。
- 第20回例会。原坦山氏「佛教に就いての疑問に答ふ」、外山正一氏「読心術」。

以下略

3 加藤弘之は明治10年9月3日付けの上申書

「今文学部中特ニ和漢文ノ一科ヲ加フル所以ハ目今ノ勢斯文幾ント
寥々 晨星ノ如ク今之ヲ大学ノ科目中ニ置カサレハ到底永久維持スヘカラ
ザルノミナラズ自ラ日本学士ト称スル者、唯リ英文ニノミ通ジテ国文ニ
茫乎タルアラバ真ニ文運ノ精英ヲ収ム可カラザレバナリ但シ和漢文ノミ
ニテハ固陋ニ失スルヲ免カレザルノ憂アレハ並ニ英文哲学西洋歴史ヲ兼
修セシメ以テ有用ノ人材ヲ育セント欲ス」

(出典：三宅雪嶺、『大学今昔譚』日本教育史基本文献・資料叢書8、大空社、34頁から引用)。

4

「哲学と云ふ科目が専ら西洋哲学、西洋哲学史、心理学等を含み、東洋哲学に関するものゝ全く見えざること等は、当時の東洋研究の大勢を見るべきものなり」

(出典：『東京帝国大学五十年史』上巻、昭和七年、東京帝国大学刊、687頁)

5 原坦山（1819—92）

幕末、明治期の曹洞宗の僧。号は覚仙、鶴巣。磐城平（現いわき市）の藩士新井勇輔の長男として生まれる。1833年（天保4）15歳で昌平黌に学び、40年多紀 安叔の塾に入つて医術を修める。20歳のとき浅草総泉寺の栄禪について出家。72年（明治5）教部省から教導職少教正に任せられる。79年東京大学印度（インド）哲学科の初代講師となり、『大乗起信論』の講義を担当する。85年学士院会員に選ばれ、91年曹洞宗大学林總監、92年には同宗管長（かんちょう）事務取扱として宗務をつかさどる。著書には、西洋医学の知識による『心識論』などがある。また『心性実験録』をめぐって福田行誠との間で論争が行われている。

6

「嗚呼憐れむべき哉今の学佛の諸仁者、或は經論の義解に沈没し、章句
の穿鑿に精神を費し、畢生にも学道の要旨を知らず、或は兀座習禪して
有氣力の死人の如く、終身實用をなす能はず」

(出典：『原坦山和尚全集』、釈悟庵編集、名著普及会刊、所収「妄想
菩薩成佛不思議經」)

7

『大乗起信論』という論書は、「馬鳴論師の活眼を以て、大乗佛教全体
に就き、達意論を為したるものなり、大乗佛教の理想を抽象して、初學
の徒に見せしめたるものなり、故に何の經巻に依ると依拠の經巻を穿鑿
すべきものにあらず、故に古來之を大乗通申論なりとす」。

(出典：村上專精『大乗起信論講話』、大正8年、丙午出版社、13頁)。

8

「佛教哲学の中心は、この『起信論』一部に収まつておるというのも差
し支えないほどです」。さらになぜ起信論が「哲学的」なのかを説明して
円了は言う。「『起信論』はフィヒテの唯心論に似ておるし、またシェリ
ングの説にも似ておる。さらばシェリングの説はどうかというに、曰く
『絶対的理性なるものは、元来主觀客觀を超越したものであつて、全然
物と心との両者の區別をもたない平等一如の體です。宇宙万有はその本
質本体をいうと、この無差別平等の一如的絶対理性と全然同一なもので
ある』といつてあるから、『起信論』の所説とほぼ同じである」。

(出典：『佛教通觀』第10章「起信論」、「井上円了選集」第7巻収載、
東洋大学編、141頁と165頁)

「大乗起信論なる書は片々たる小冊子ではあるが、北方仏教に於ける雜多著述の中、有力なる論部であることは論を俟たぬ。又單に哲学の方面
からしてのみ之を觀察しても、古今を通じ東西に涉つて、比類罕なる好著
であるといつて差支なかろう。彼のシオベンハワーが『最高人智の産出する所 (die Ausgeburt der höchsten menschlichen Weisheit)』と口を極めて賞賛したウペニカート (Upanikhat 即ち upanisad) は由来印度哲学の精華と称せらるゝものであるが、今起信論を以て之に比すれば、此は少くとも其叙述の方法に於て、更らに一頭地を抜いて居ることも明らかである。だから起信論の内容を現代的に説明し、若しくは其思想の由来を歴史的に解釈するといふことも、甚だ有益な事業である」。

(出典：松本文三郎『仏典の研究』丙午出版社、大正3年、1頁)

「起信論においてとられた〈真如〉や〈一心〉は、禪思想史の根源を形成するものとなり、道家思想の〈道〉の概念と融和解釈され、中国の禪思想史に継承発展され、真心・心体としてとらえられていったのである。それを考えると、禪思想史の発見となった起信論の一心や、衆生心の考え方には、すこぶる重要な意味をもつ」。

(出典：鎌田茂雄『宗密教学の思想的研究——中国華嚴思想史の研究第二——』東洋文化研究所、1975、494頁)

11

「坦山氏が講師として仏典を講ずるやうになり、その講義は最初『大乗起信論』をテキストとして用ひた。講義の仕方はこれ亦上乗とは思はれなかつたが、その撰んだテキストが好かつたため、学生も喜んで聴き、又学生のみならず、時の綜理加藤博士も初めの内はこれを傍聴され、大学以外からは西村茂樹博士のやうな人も来聴され、その他外山正一博士のやうな教授も席に列るなど種々の人々が聴講したやうに、坦山氏の仏典講義は当時学界の注目を惹いた。兎に角、廢仏毀釈の後を受けて仏教の形勢が甚だ振るはなかつた時代に、大学で仏典を講じたことは、歴史上注目すべきことである。自分が初めて大乗仏教の哲学に興味を覚えたのはこの時であるが、他にも自分と同様の影響を受けたものが尠くなかつたであらうと推察される。自分が今日に及んでも猶ほ大乗仏教の哲学的研究を怠らないのは、^{そもそも}抑々何に因つて然るかと言へば、固より哲学としてこれに興味を持つからであるが、その興味を喚び起させたものは、蓋し坦山氏である」

(出典：「井上哲次郎自伝」7頁、「井上哲次郎集」、第8巻所収、クレス出版、2003年)

12

「Reality 実体、真如、按、起信論、當知一切法不可說、不可念、故名為真如」。(まさに知るべし、一切法は説くべからず、念ずべからず、ゆえに真如と名づく)

出典：『哲学字彙』初版は明治14年、東京大学三学部印行の復刻版、名著普及会、1980、76頁。

1 3

「禪仏教の絶対者は存在論的に此の世から離れた超越的現実ではない。それは現象的な世界であり、いわば現象界の内面であり、覺醒した者によって觀られるものである」。

"...ch'an buddhism was a Chinese creation and the parent of Japanese Zen, laid emphasis on the possibility of enlightenment in the midst of a person's daily and socialy useful occupations. Moreover, the Absolute of Ch'an Buddhism was not a transcendent reality, ontologically distinct from this world. It was the phenomenal world, the inside, so to speak, of the phenomenal world, as seen by the enlightened mind." Frederick C. Copleston, *Philosophies & Cultures*, Oxford Univ. Press 1980, p. 40.

1 4

「例へば、起信論に真如を説きて云く、『一切法從本已來、離言説相、離名字相、離心縁相、畢竟平等、無有變異不可破壞、唯是一心、故名真如』と、真如は即ち實在なり、是れ内部の直觀により領悟すべきものにて、特殊の現象に於ける認識の如く弁別作用によりて説明すべきものにあらざるなり、起信論の文は此意を叙述して、甚だ明晰」。

出典：「認識と實在との關係」明治34年、井上哲次郎編『哲学叢書』第1集第1冊、集文閣、362頁。

1 5

明治三六年六月一一日（木）出校。雨降る。入湯。起信論一巻読了。余は時に佛教の歴史的研究をもなさんと欲す。余はあまりに多欲、あまりに功名心に強し。一大真理を悟得して之を今日の学理にて人に説けば可なり。此の外の余計の望を起すべからず。多く望む者は一事をなし得ず。

16

「仏教の大目的は・・・即ち相対的差別界を脱して絶対的無差別界に入らんとするのである」。そして「仏教は派に因りて種々に変じ居れども元來無神論であつて万有神教である。万物の本は一であつて之を真如と名づく、即一元論である。而して其一元とは一心であつて即ち唯心的一元論である。併し此の一心とは固より個人の心を指すのではなくて絶対的精神をいふのである。唯識には之を賴耶識といふ。起信論には之を一心と名づけ真如、生滅の両方面を具するものとなす」⁽⁵⁾。

出典：岩波書店版「西田幾多郎全集」、第16巻、1980、497-8頁

17

『善の研究』の第一編第一章の冒頭で明確に表明されている「純粹経験」の概念規定をここに引いてみれば、それは仏教の清浄心・平等心、つまり起信論でいう「心真如」を西洋哲学的に言いかえたものと分かる必要があります。つまり、概念的・意味的には同一だということに気づく必要性です。

経験するというのは事実其の儘に知るの意である。全く自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。純粹というのは、普通に経験といっている者もその実は何らかの思想を交えているから、毫も思慮分別を加えない、真に経験其儘の状態をいうのである。たとえば、色を見、音を聞く刹那、未だこれが外物の作用であるとか、我がこれを感じているとかいうような考のないのみならず、この色、この音は何であるという判断すら加わらない前をいうのである。それで純粹経験は直接経験と同一である。自己の意識状態を直下に経験した時、未だ主もなく客もない、知識とその対象とが全く合一している。これが経験の最醇なる者である。

近頃ハーヴァト大学のジェームス教授の講義せる *The Varieties of Religious Experience* を読む(君も此書は既に知れるならんと信ず)頗る面白し、自余の哲学者の如く無理に馳せず、多くの具体的事実を引証して巻を成す、同教授は余程宗教心に富むと見えたり、(中略)直に人の肺腑に入る、宗教的経験を妄想迷信と云ふ名の下に却け去らず、之を心理上の事実として研究せんとする教授の見處既に予の意を得、フイリングを第一としてインテレクトを次に置き、宗教は哲学、科学を離れて別調の生涯あり、而して此生涯は事実なりと説く、君もし閑あらば一読して見玉はんか、必ず君を益する所あらんと信ず、

之に就き思ひ起すは、予の嘗て鎌倉に在りし時、一夜期定の坐禪を行へ、禅堂を下り、月明に乗じて樹立の中を過ぎ帰源院の庵居に帰らんとして山門近く下り来るとき、忽然として自らをわする、否、全く忘れたるにはあらざりしが如し、されど月のあかきに樹影參差して地に印せるの状、宛然画の如く、自ら其画中の人となりて、樹と吾との間に何の区別もなく、樹是吾れ、本来の面目、歴然たる思ありき、やがて庵に帰りて後も胸中釈然として少しも凝滞なく、何となく歡喜の情に充つ、当時の心状今一々言詮し難し、頃日ゼームス氏の書を読むに至りて、予の境涯を其まゝに描かれたる心地し、数年来なき命の洗濯したり、(中略)この境涯は哲学にあらず、道徳にあらず、意識の上へ一寸顔を出して閃電せんが如く亦直に引き込む刹那、悟入する所ありて安心の語を得るなり、機一髪なり、(以下略)。※ 書簡(明治35年9月23日付け)

出典：『西田幾多郎宛 鈴木大拙書簡 — 億劫別れて須臾も離れず —』西村恵信編、岩波書店、2004、94頁

19

「単に超越的に最高善的な神は、抽象的な神たるに過ぎない。絶対の神は自己自身の中に絶対の否定を含む神でなければならない。極悪にまで下り得る神でなければならない。悪逆無道を救う神にして、真に絶対の神であるのである」。ただし、この「神」は世界の外から人類に手を差しのべる「超越的神」ではなく、「純粹経験」が、つまり「心真如」が完成して「悪逆無道」を駆逐できれば、その心意は「神」であると表現し直しているのです。「純粹経験」「心真如」が「神」「仏」と主張しているのです。さらに「仏教に於て觀ずると云ふことは、対象的に外に仏を觀ることではなくして、自己の根源を照すこと、省みることである。外に神を見ると云ふならば、それは魔法に過ぎない」

(出典：『哲学論文集』岩波書店、1946、161頁)。

20

英國 ミル (John Stuart Mill) 著、中村正直訳、『自由之理』
「思想を嗜むものは、理学者なれば、理学者のことを思想者ともいふ。思想者の大家は、その才知の至るところに従がひ、何れの方になりとも、これに導かれ、その帰結するところに任することなり。これを以て第一の職分と為せり。蓋し人、或は予め學習し、自ら思想して、謬見に入るるものあり。或は、自ら思想せずして、たゞ真説を執るものあり。然れども、真理は思想したる謬見より顯るゝこと多く、思想せざる真説より顯るゝこと少なし（中略）何れにても今まで受るところの意見、たとひ真理あるにもせよ、十分に他人をして自由に議論し、恐れずに弁駁せしむることを許さゞれば、その意見は、死執したる定説にして、生活したる真理にあらず。（中略）もし弁駁を受けずして、これは真確なりと信ずるは、人たるものゝ真理を求むる所以の道にあらず。かくの如き方法にて求め得たる真理は、その人自らは真理と思ふべけれども、畢竟荒唐無稽なる妄説なり。偶然言語に纏れたる謬見なり」。（原文は片仮名表記）

(出典：明治文化全集、第二巻「自由民権論」、日本評論新社、昭和30年、29-30頁)